結　果　の　概　要

1　発育状態

（1）　身　長

①　平成 24 年度の男子の身長の平均値は、５歳から９歳、11 歳、15 歳及び 16 歳の各年齢で前年度の同年齢より低くなっている。女子の身長は、５歳、８歳、９歳、12 歳から 14 歳及び 16 歳の各年齢で前年度の同年齢より低くなっている。

②　平成 24 年度の身長を 30 年前の昭和 57 年度（親の世代）と比較すると、男子は５歳及び６歳を除く各年齢で、女子は５歳及び 16 歳を除く各年齢で親の世代を上回っている。最も差がある年齢は、男子は 12 歳で 2.6cm、女子は 10 歳で 1.6cm 親の世代より高くなっている。

③　平成 24 年度の身長を全国平均値と比較すると、男子は７歳及び８歳を除く各年齢で、女子は５歳、８歳及び９歳を除く各年齢で全国平均値を上回っている。最も差がある年齢は、男子は 13 歳で 1.1cm、女子は 17 歳で 0.7cm 全国平均値より高くなっている。

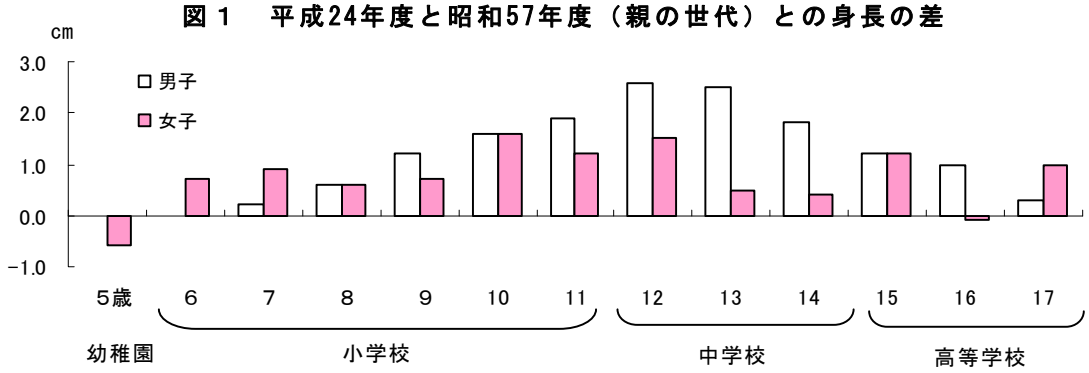
（表１、図１、統計表１、２－１、２－２）

表１　年齢別身長の平均値

（単位:cm）

区分		男子							女子						
		平成24年度 A	平成23年度 B	差 A-B	昭和57年度（親の世代） C	差 A-C	平成24年度 全国 D	差 A-D	平成24年度 E	平成23年度 F	差 E-F	昭和57年度（親の世代） G	差 E-G	平成24年度 全国 H	差 E-H
幼稚園	5歳	110.8	111.2	△ 0.4	110.8	0.0	110.5	0.3	109.5	110.0	△ 0.5	110.1	△ 0.6	109.5	0.0
小学校	6歳	116.9	117.1	△ 0.2	116.9	0.0	116.5	0.4	116.1	115.7	0.4	115.4	0.7	115.6	0.5
	7歳	122.4	123.2	△ 0.8	122.2	0.2	122.4	0.0	122.2	121.8	0.4	121.3	0.9	121.6	0.6
	8歳	128.2	128.6	△ 0.4	127.6	0.6	128.2	0.0	127.4	127.8	△ 0.4	126.8	0.6	127.4	0.0
	9歳	134.1	134.4	△ 0.3	132.9	1.2	133.6	0.5	133.4	133.9	△ 0.5	132.7	0.7	133.4	0.0
	10歳	139.3	138.6	0.7	137.7	1.6	138.9	0.4	140.2	140.1	0.1	138.6	1.6	140.1	0.1
	11歳	145.3	146.3	△ 1.0	143.4	1.9	145.0	0.3	147.0	146.5	0.5	145.8	1.2	146.7	0.3
中学校	12歳	153.2	153.1	0.1	150.6	2.6	152.4	0.8	152.2	152.5	△ 0.3	150.7	1.5	151.9	0.3
	13歳	160.6	159.9	0.7	158.1	2.5	159.5	1.1	155.3	155.5	△ 0.2	154.8	0.5	155.0	0.3
	14歳	165.9	165.8	0.1	164.1	1.8	165.1	0.8	156.8	157.3	△ 0.5	156.4	0.4	156.5	0.3
高等学校	15歳	168.7	169.2	△ 0.5	167.5	1.2	168.4	0.3	157.6	157.5	0.1	156.4	1.2	157.2	0.4
	16歳	170.2	170.6	△ 0.4	169.2	1.0	169.8	0.4	158.0	158.2	△ 0.2	158.1	△ 0.1	157.6	0.4
	17歳	170.9	170.8	0.1	170.6	0.3	170.7	0.2	158.7	158.2	0.5	157.7	1.0	158.0	0.7

図１　平成24年度と昭和57年度（親の世代）との身長の差



注）身長の差は、都の平成 24 年度平均値から昭和 57 年度（親の世代）平均値を引いたものである。

④　平成６年度生まれ（平成 24 年度 17 歳）の年間発育量をみると、男子は 12 歳時に最大の発育量を示しており、女子は 10 歳時に最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢は、女子が男子に比べ２歳早くなっている。

年間発育量を昭和 39 年度生まれ（親の世代の 17 歳）と比較すると、男子では親の世代が最大の発育量を示すのは 12 歳時であり、平成６年度生まれは親の世代と同じ年齢に最大の発育量を示している。また、５歳、８歳から 11 歳及び 15 歳の各歳時で親の世代を上回っている。女子では親の世代が最大の発育量を示すのは６歳時、９歳時及び 10 歳時である。また、５歳、８歳から 10 歳及び 16 歳の各歳時で親の世代を上回っている。

（表２、図２、統計表１、２－１、２－２）

表２　平成６年度生まれと昭和39年度生まれの年間発育量の比較（身長）

（単位：cm）

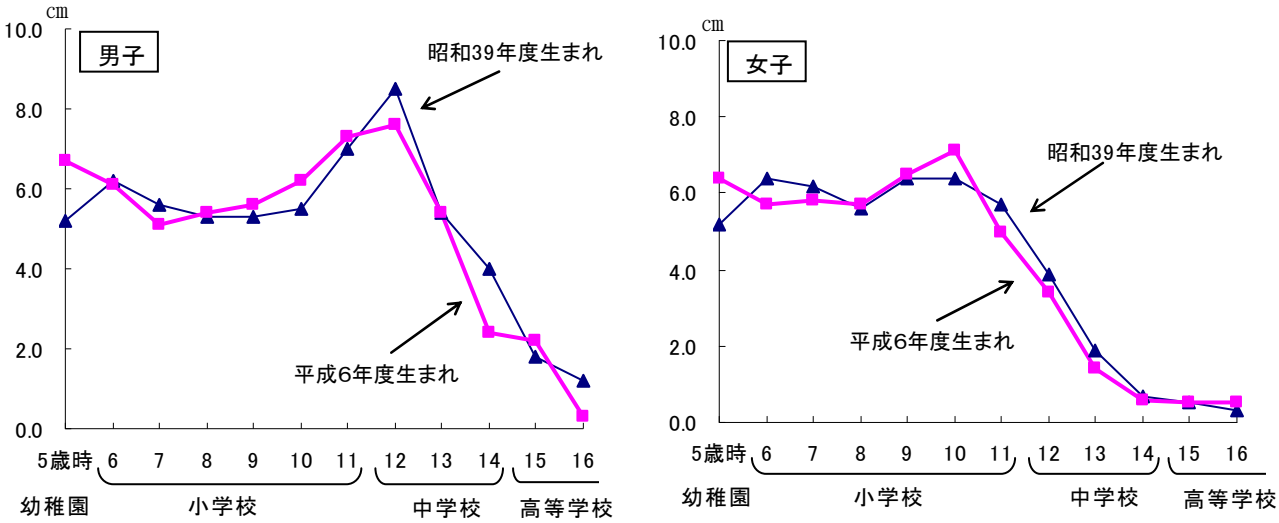
区分		男子		女子	
		平成6年度生まれ（平成24年度17歳）	昭和39年度生まれ（親の世代の17歳）	平成6年度生まれ（平成24年度17歳）	昭和39年度生まれ（親の世代の17歳）
幼稚園	5歳時	6.7	5.2	6.4	5.2
小学校	6歳時	6.1	6.2	5.7	6.4
	7歳時	5.1	5.6	5.8	6.2
	8歳時	5.4	5.3	5.7	5.6
	9歳時	5.6	5.3	6.5	6.4
	10歳時	6.2	5.5	7.1	6.4
	11歳時	7.3	7.0	5.0	5.7
中学校	12歳時	7.6	8.5	3.4	3.9
	13歳時	5.4	5.4	1.4	1.9
	14歳時	2.4	4.0	0.6	0.7
高等学校	15歳時	2.2	1.8	0.5	0.5
	16歳時	0.3	1.2	0.5	0.3
総発育量		60.3	61.0	48.6	49.2

注1）　年間発育量とは、例えば、平成6年度生まれ（平成24年度17歳）の「5歳時」の年間発育量を算出する場合、平成13年度調査6歳の者の身長から平成12年度調査5歳の者の身長を引いた数値である。

2）　網掛けの数値は、最大の年間発育量を示す。

3）　昭和39年度生まれの5歳時、6歳時の数値は、都道府県別集計が行われなかったため、全国値である。

図２　平成６年度生まれと昭和 39 年度生まれの年間発育量の比較（身長）



（2） 体 重

① 平成 24 年度の男子の体重の平均値は、６歳から８歳、11 歳、15 歳及び 17 歳の各年齢で前年度の同年齢より軽くなっている。女子の体重は、６歳、７歳、10 歳から 13 歳、15 歳及び 16 歳の各年齢で前年度の同年齢より重くなっている。

② 平成 24 年度の体重を 30 年前の昭和 57 年度（親の世代）と比較すると、男子は５歳及び７歳を除く各年齢で、女子は５歳、15 歳及び 16 歳を除く各年齢で親の世代を上回っている。最も差がある年齢は、男子は 12 歳で 2.4kg、女子は 10 歳で 1.0kg 親の世代より重くなっている。

③ 平成 24 年度の体重を全国平均値と比較すると、男子は５歳、10 歳から 14 歳及び 16 歳の各年齢で全国平均値を上回っており、女子は５歳、８歳、９歳、11 歳、12 歳及び 14 歳から 17 歳の各年齢で全国平均値を下回っている。最も差がある年齢は、男子は 13 歳で 1.3kg 全国平均値より重く、女子は 14 歳で 0.5kg 全国平均値より軽くなっている。

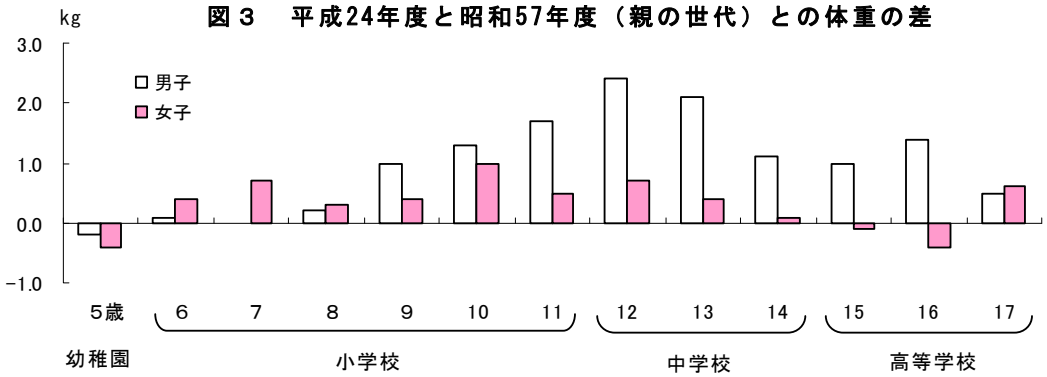
（表３、図３、統計表１、３－１、３－２）

表３ 年齢別体重の平均値

（単位:kg）

区分		男子							女子						
		平成24年度 A	平成23年度 B	差 A-B	昭和57年度（親の世代） C	差 A-C	平成24年度全国 D	差 A-D	平成24年度 E	平成23年度 F	差 E-F	昭和57年度（親の世代） G	差 E-G	平成24年度全国 H	差 E-H
幼稚園	5歳	19.0	19.0	0.0	19.2	△ 0.2	18.9	0.1	18.4	18.6	△ 0.2	18.8	△ 0.4	18.5	△ 0.1
小学校	6歳	21.3	21.4	△ 0.1	21.2	0.1	21.3	0.0	20.9	20.8	0.1	20.5	0.4	20.9	0.0
	7歳	23.8	24.2	△ 0.4	23.8	0.0	24.0	△ 0.2	23.6	23.4	0.2	22.9	0.7	23.5	0.1
	8歳	26.7	27.2	△ 0.5	26.5	0.2	27.1	△ 0.4	26.1	26.4	△ 0.3	25.8	0.3	26.3	△ 0.2
	9歳	30.5	30.5	0.0	29.5	1.0	30.5	0.0	29.5	29.6	△ 0.1	29.1	0.4	29.9	△ 0.4
	10歳	34.4	33.3	1.1	33.1	1.3	34.0	0.4	34.0	33.6	0.4	33.0	1.0	34.0	0.0
	11歳	38.3	39.2	△ 0.9	36.6	1.7	38.2	0.1	38.7	38.2	0.5	38.2	0.5	38.9	△ 0.2
中学校	12歳	44.5	43.7	0.8	42.1	2.4	44.0	0.5	43.3	43.2	0.1	42.6	0.7	43.7	△ 0.4
	13歳	50.3	49.2	1.1	48.2	2.1	49.0	1.3	47.4	47.0	0.4	47.0	0.4	47.4	0.0
	14歳	54.6	54.5	0.1	53.5	1.1	54.2	0.4	49.4	50.1	△ 0.7	49.3	0.1	49.9	△ 0.5
高等学校	15歳	59.1	60.3	△ 1.2	58.1	1.0	59.2	△ 0.1	51.4	50.9	0.5	51.5	△ 0.1	51.6	△ 0.2
	16歳	61.2	61.2	0.0	59.8	1.4	61.1	0.1	52.1	52.0	0.1	52.5	△ 0.4	52.5	△ 0.4
	17歳	62.7	62.9	△ 0.2	62.2	0.5	62.9	△ 0.2	52.5	52.5	0.0	51.9	0.6	52.9	△ 0.4

図３ 平成24年度と昭和57年度（親の世代）との体重の差



注）体重の差は、都の平成 24 年度平均値から昭和 57 年度（親の世代）平均値を引いたものである。

④　平成６年度生まれ（平成 24 年度 17 歳）の年間発育量をみると、男子は 12 歳時に最大の発育量を示しており、女子は 10 歳時に最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢は、女子が男子に比べ２歳早くなっている。

年間発育量を昭和 39 年度生まれ（親の世代の 17 歳）と比較すると、男子では親の世代が最大の発育量を示すのは 12 歳時であり、平成６年度生まれは親の世代と同じ年齢に最大の発育量を示している。また、５歳、７歳及び９歳から 11 歳の各歳時で親の世代を上回っている。女子では親の世代が最大の発育量を示すのは 11 歳時であり、平成６年度生まれは親の世代より１歳早く最大の発育量を示している。また、５歳、７歳、８歳、10 歳、12 歳及び 16 歳の各歳時で親の世代を上回っている。

（表４、図４、統計表１、３－１、３－２）

表４　平成６年度生まれと昭和39年度生まれの年間発育量の比較（体重）

（単位:kg）

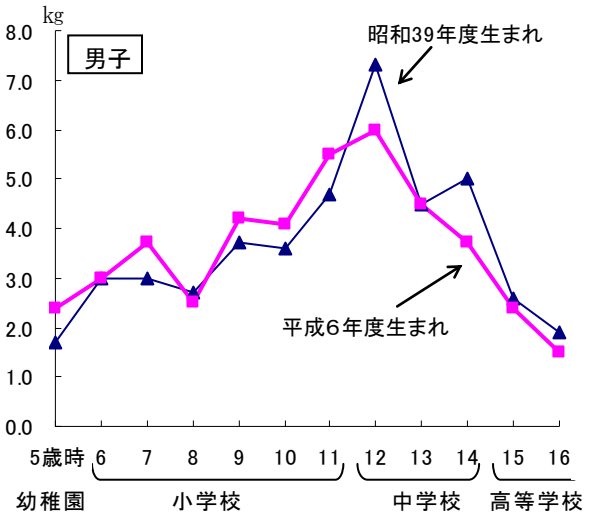
区分		男子		女子	
		平成6年度生まれ（平成24年度17歳）	昭和39年度生まれ（親の世代の17歳）	平成6年度生まれ（平成24年度17歳）	昭和39年度生まれ（親の世代の17歳）
幼稚園	5歳時	2.4	1.7	2.6	1.7
小学校	6歳時	3.0	3.0	2.3	2.9
	7歳時	3.7	3.0	3.1	2.9
	8歳時	2.5	2.7	3.7	3.4
	9歳時	4.2	3.7	3.5	3.9
	10歳時	4.1	3.6	5.1	4.2
	11歳時	5.5	4.7	4.2	5.6
中学校	12歳時	6.0	7.3	4.7	4.2
	13歳時	4.5	4.5	1.9	2.5
	14歳時	3.7	5.0	1.6	2.0
高等学校	15歳時	2.4	2.6	0.4	0.7
	16歳時	1.5	1.9	0.5	△ 0.1
総発育量		43.5	43.7	33.6	33.9

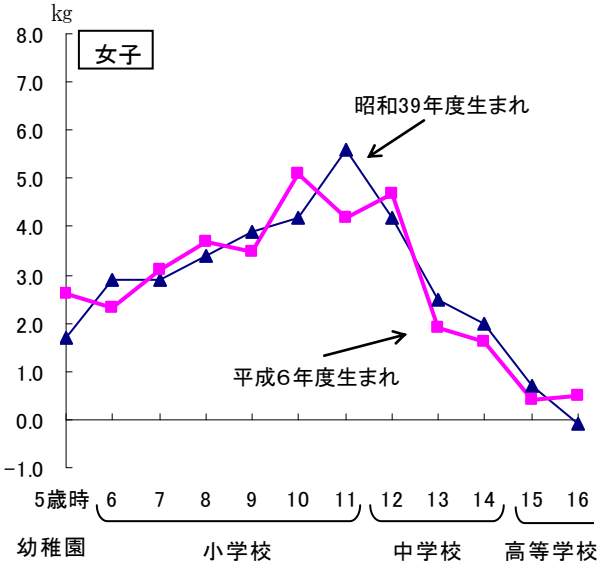
注1）　年間発育量とは、例えば、平成6年度生まれ（平成24年度17歳）の「5歳時」の年間発育量を算出する場合、平成13年度調査6歳の者の体重から平成12年度調査5歳の者の体重を引いた数値である。

2）　網掛けの数値は、最大の年間発育量を示す。

3）　昭和39年度生まれの5歳時、6歳時の数値は、都道府県別集計が行われなかったため、全国値である。

図４　平成６年度生まれと昭和 39 年度生まれの年間発育量の比較（体重）





（3） 座 高

① 平成 24 年度の男子の座高の平均値は、５歳から９歳、11 歳、12 歳、15 歳及び 16 歳の各年齢で前年度の同年齢より低くなっている。女子の座高は、５歳、８歳、９歳及び 12 歳から 15 歳の各年齢で前年度の同年齢より低くなっているが、16 歳が 86.0cm、17 歳が 86.1cm で過去最高となった。

② 平成 24 年度の座高を 30 年前の昭和 57 年度（親の世代）と比較すると、男子は５歳から７歳を除く各年齢で、女子は５歳及び６歳を除く各年齢で親の世代を上回っている。最も差がある年齢は、男子は 13 歳で 1.7cm 親の世代より高く、女子は５歳で 1.2cm 親の世代より低くなっている。

③ 平成 24 年度の座高を全国平均値と比較すると、男子は７歳、８歳及び 15 歳を除く各年齢で、女子は６歳、７歳、10 歳、11 歳、13 歳及び 15 歳から 17 歳の各年齢で全国平均値を上回っている。最も差がある年齢は、男子は 13 歳で 0.5cm、女子は 16 歳及び 17 歳で 0.3cm 全国平均値より高くなっている。

（表５、図５、統計表１、４－１、４－２）

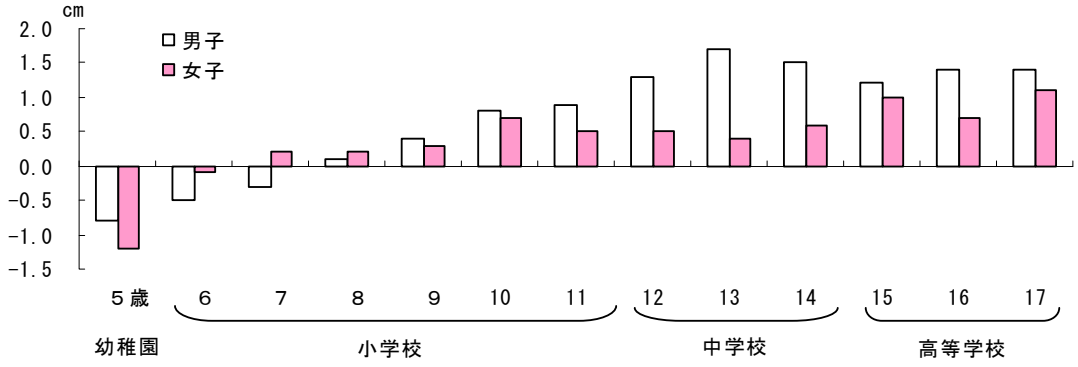
表５ 年齢別座高の平均値

（単位:cm）

区分		男子 平成24年度 A	平成23年度 B	差 A-B	昭和57年度（親の世代） C	差 A-C	平成24年度全国 D	差 A-D	女子 平成24年度 E	平成23年度 F	差 E-F	昭和57年度（親の世代） G	差 E-G	平成24年度全国 H	差 E-H
幼稚園	5歳	62.0	62.1	△ 0.1	62.8	△ 0.8	61.9	0.1	61.3	61.6	△ 0.3	62.5	△ 1.2	61.4	△ 0.1
小学校	6歳	64.9	65.0	△ 0.1	65.4	△ 0.5	64.8	0.1	64.6	64.4	0.2	64.7	△ 0.1	64.4	0.2
	7歳	67.5	68.0	△ 0.5	67.8	△ 0.3	67.6	△ 0.1	67.5	67.3	0.2	67.3	0.2	67.3	0.2
	8歳	70.2	70.4	△ 0.2	70.1	0.1	70.3	△ 0.1	69.9	70.1	△ 0.2	69.7	0.2	69.9	0.0
	9歳	72.8	73.0	△ 0.2	72.4	0.4	72.6	0.2	72.6	72.8	△ 0.2	72.3	0.3	72.6	0.0
	10歳	75.2	74.7	0.5	74.4	0.8	74.9	0.3	75.9	75.7	0.2	75.2	0.7	75.8	0.1
	11歳	77.7	78.2	△ 0.5	76.8	0.9	77.5	0.2	79.3	79.1	0.2	78.8	0.5	79.2	0.1
中学校	12歳	81.5	81.6	△ 0.1	80.2	1.3	81.3	0.2	82.0	82.3	△ 0.3	81.5	0.5	82.2	△ 0.2
	13歳	85.4	84.9	0.5	83.7	1.7	84.9	0.5	84.0	84.1	△ 0.1	83.6	0.4	83.9	0.1
	14歳	88.4	88.3	0.1	86.9	1.5	88.2	0.2	84.8	85.3	△ 0.5	84.2	0.6	84.9	△ 0.1
高等学校	15歳	90.3	90.9	△ 0.6	89.1	1.2	90.3	0.0	85.6	85.7	△ 0.1	84.6	1.0	85.4	0.2
	16歳	91.4	91.7	△ 0.3	90.0	1.4	91.3	0.1	86.0	85.9	0.1	85.3	0.7	85.7	0.3
	17歳	92.0	92.0	0.0	90.6	1.4	91.9	0.1	86.1	85.9	0.2	85.0	1.1	85.8	0.3

注）平成24年度については、昭和23年度以降の最高値を網掛けで示している。

図５ 平成24年度と昭和57年度（親の世代）との座高の差



注）座高の差は、都の平成 24 年度平均値から昭和 57 年度（親の世代）平均値を引いたものである。

2　健康状態

（1）　疾病・異常の被患率等の状況

学校種別に疾病・異常の被患率等をみると、すべての学校種において、「むし歯（う歯）」のある者の割合が、30%を超えている。また、小学校、中学校及び高等学校において、「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合が、30%を超えており、「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合が、10%を超えている。

（表６、統計表５－１）

表６　学校種別疾病・異常の被患率等

区分(%)		幼稚園(5歳)	小学校(6～11歳)	中学校(12～14歳)	高等学校(15～17歳)
90以上					
80以上～90未満					
70～80					裸眼視力1.0未満 71.8
60～70				裸眼視力1.0未満 63.8	
50～60					むし歯(う歯) 57.0
40～50			むし歯(う歯) 48.9		
30～40		むし歯(う歯) 37.7	裸眼視力1.0未満 35.7	むし歯(う歯) 39.3	
20～30					
10～20			鼻・副鼻腔疾患 11.6	鼻・副鼻腔疾患 11.7	鼻・副鼻腔疾患 11.8
1～10	8～10				
	6～8		眼の疾病・異常 7.3 耳疾患 6.8		歯列・咬合 6.2 歯垢の状態 6.2
	4～6		ぜん息 5.6 歯・口腔のその他の疾病・異常 4.3 アトピー性皮膚炎 4.3 歯垢の状態 4.1	ぜん息 4.7 眼の疾病・異常 4.4 歯列・咬合 4.4 歯垢の状態 4.1 耳疾患 4.0	眼の疾病・異常 5.0 歯肉の状態 4.9
	2～4	歯列・咬合 3.6 アトピー性皮膚炎 3.2 ぜん息 3.2 口腔咽喉頭疾患・異常 2.6 耳疾患 2.3 鼻・副鼻腔疾患 2.3 歯・口腔のその他の疾病・異常 2.2	歯列・咬合 3.5 歯肉の状態 2.6	蛋白検出の者 3.0 歯肉の状態 2.8 歯・口腔のその他の疾病・異常 2.7 アトピー性皮膚炎 2.7 心電図異常 2.0	耳疾患 3.2 ぜん息 3.2 蛋白検出の者 2.6 アトピー性皮膚炎 2.0
	1～2	その他の皮膚疾患 1.5 歯垢の状態 1.0	栄養状態 1.8	栄養状態 1.3 せき柱・胸郭 1.3	心電図異常 1.9 歯・口腔のその他の疾病・異常 1.2 せき柱・胸郭 1.1 栄養状態 1.0
0.1～1	0.5～1	蛋白検出の者 0.8 眼の疾病・異常 0.6 心臓の疾病・異常 0.5	心電図異常 0.9 口腔咽喉頭疾患・異常 0.8 その他の皮膚疾患 0.7 心臓の疾病・異常 0.7 蛋白検出の者 0.7 難聴 0.5	心臓の疾病・異常 0.5	顎関節 0.7 心臓の疾病・異常 0.6 口腔咽喉頭疾患・異常 0.5
	0.1～0.5	栄養状態 0.3 言語障害 0.2 顎関節 0.1 歯肉の状態 0.1 せき柱・胸郭 0.1	せき柱・胸郭 0.4 腎臓疾患 0.2 言語障害 0.2 顎関節 0.1 尿糖検出の者 0.1 寄生虫卵保有者 0.1	難聴 0.2 口腔咽喉頭疾患・異常 0.2 顎関節 0.2 腎臓疾患 0.2 その他の皮膚疾患 0.1 尿糖検出の者 0.1	難聴 0.3 その他の皮膚疾患 0.2 尿糖検出の者 0.2 腎臓疾患 0.2
0.1未満				言語障害 0.0	結核 0.0 言語障害 0.0

注1）「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、アデノイド、へんとう肥大、咽頭炎、喉頭炎、へんとう炎、音声言語異常のある者等である。

2）「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、だ石、癒合歯、要注意乳歯等のある者等である。

3）「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。

4）「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。

5）難聴については、6歳から8歳、10歳、12歳、14歳、15歳及び17歳、結核については、6歳から15歳、心電図異常については、6歳、12歳及び15歳、糖尿検出の者については、6歳から17歳、寄生虫卵保有者については、5歳から8歳のみ実施している。

6）幼稚園（5歳）の「裸眼視力1.0未満」については、疾病・異常被患率等の標準誤差が5%以上、受検者数が50人未満又は回答校が1校以下のため統計数値を公表しない。

（２）　主な疾病・異常の被患率

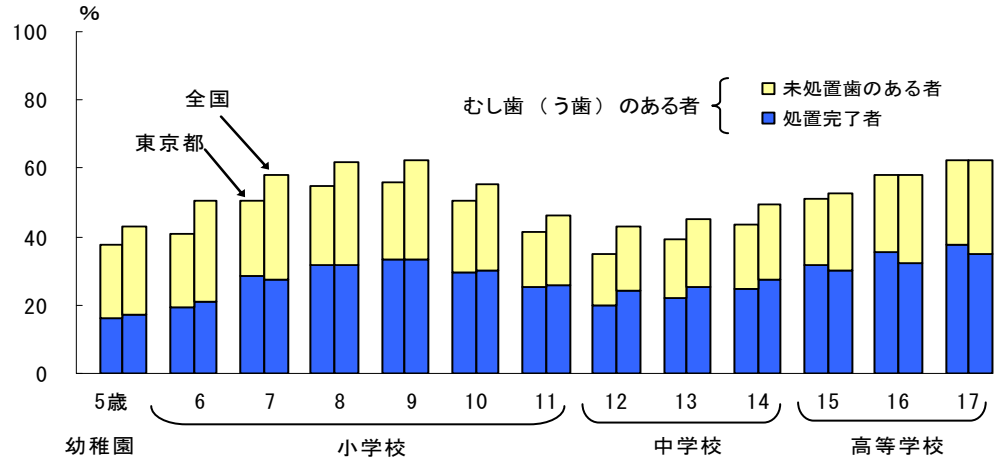
①　むし歯（う歯）

ア　年齢別に「むし歯（う歯）」のある者の割合をみると、５歳から９歳までは年齢とともに上昇し、10 歳から 12 歳までは低下している。その後、13 歳以降は上昇している。「むし歯（う歯）」のある者の割合が最も高い年齢は、17 歳で 62.3％となっている。また、「処置完了者」の割合は、５歳及び６歳を除く各年齢で「未処置歯のある者」の割合を上回っている。

イ　全国値と比較すると、17 歳を除く各年齢で「むし歯（う歯）」のある者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、６歳で 9.7 ポイント全国値より低くなっている。

（図６、統計表５－１、参考表）

図６　むし歯（う歯）のある者の割合の比較



注）むし歯（う歯）のある者＝処置完了者＋未処置歯のある者

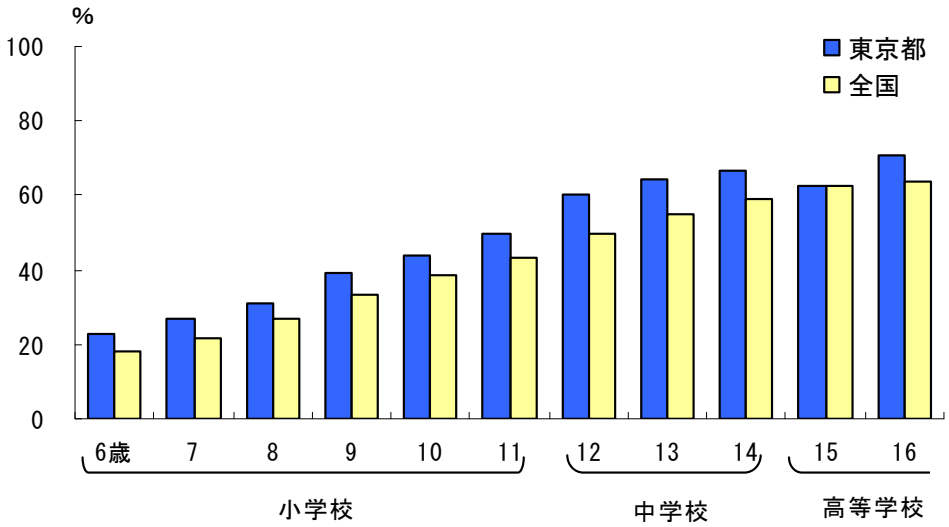
②　裸眼視力

ア　年齢別に「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合をみると、６歳から 14 歳までは年齢とともに上昇している。「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合が最も高い年齢は、16 歳で 70.9％となっている。

イ　全国値と比較すると、すべての年齢で「裸眼視力 1.0 未満」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、12 歳で 10.9 ポイント全国値より高くなっている。

（図７、統計表５－１、参考表）

図７　裸眼視力1.0未満の者の割合の比較



注）幼稚園（５歳）及び高等学校（17 歳）の「裸眼視力 1.0 未満」については、疾病・異常被患率等の標準誤差が５％以上、受検者数が 100 人（５歳は 50 人）未満又は回答校が１校以下のため統計数値を公表しない。

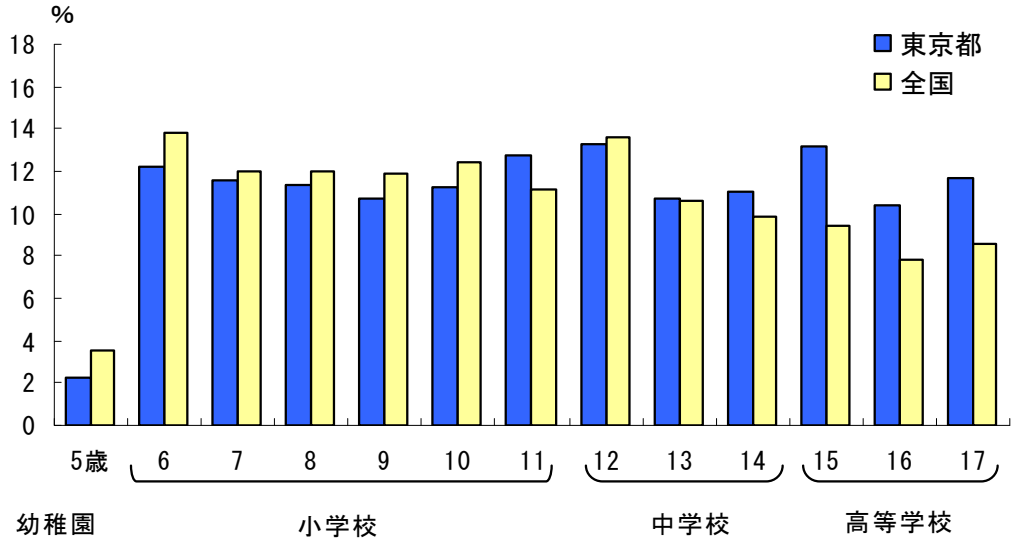
③　鼻・副鼻腔疾患

ア　年齢別に「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合をみると、５歳を除く各年齢で 10%を超えている。「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合が最も高い年齢は、12 歳で 13.3%となっている。

イ　全国値と比較すると、11 歳及び 13 歳から 17 歳の各年齢で「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、15 歳で 3.8 ポイント全国値より高くなっている。

（図８、統計表５－１、参考表）

図８　鼻・副鼻腔疾患の者の割合の比較



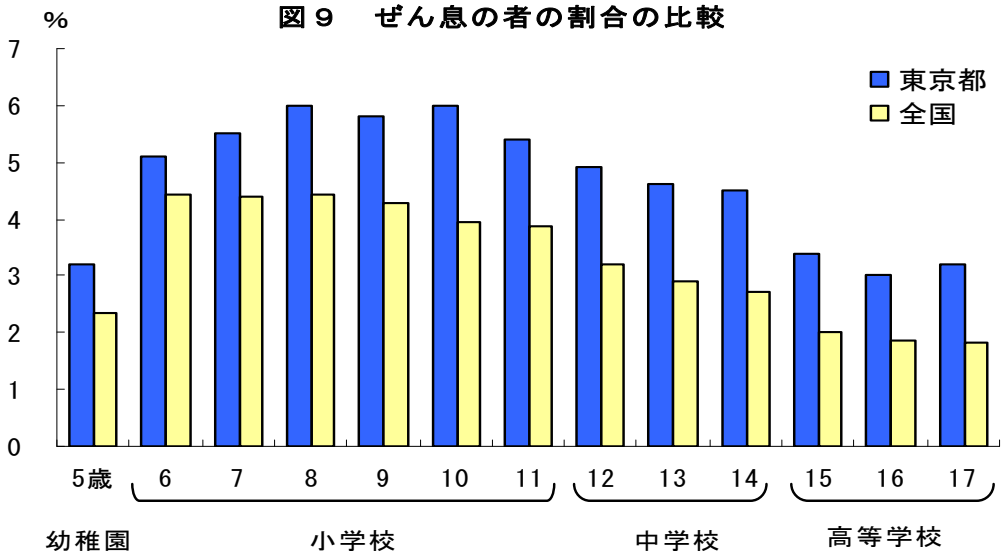
④　ぜん息

ア　年齢別に「ぜん息」の者の割合をみると、６歳から 14 歳の各年齢で４%を超えている。「ぜん息」の者の割合が最も高い年齢は、８歳及び 10 歳で 6.0%となっている。

イ　全国値と比較すると、すべての年齢で「ぜん息」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、10 歳で 2.1 ポイント全国値より高くなっている。

（図９、統計表５－１、参考表）

図９　ぜん息の者の割合の比較



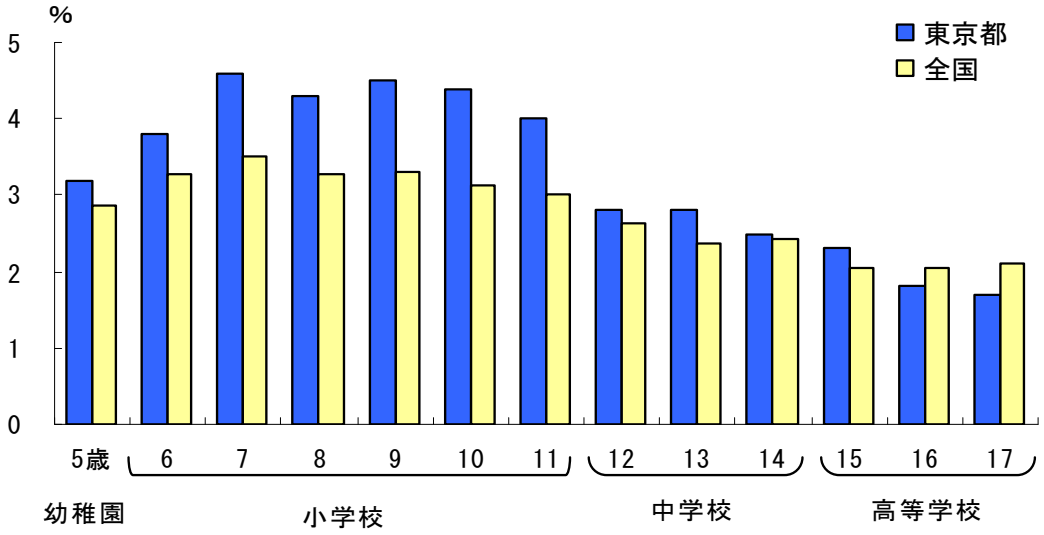
⑤　アトピー性皮膚炎

ア　年齢別に「アトピー性皮膚炎」の者の割合をみると、７歳から 11 歳の各年齢で４％以上となっている。「アトピー性皮膚炎」の者の割合が最も高い年齢は、７歳で 4.6％となっている。

イ　全国値と比較すると、16 歳及び 17 歳を除く各年齢で「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、10 歳で 1.3 ポイント全国値より高くなっている。

（図 10、統計表５－１、参考表）

図10　アトピー性皮膚炎の者の割合の比較



３　肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

（１）　肥満傾向児の出現率

①　年齢別に肥満傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は 16 歳で 12.21%、女子は 10 歳で 8.38%となっている。

②　全国値と比較すると、男子は 10 歳、13 歳及び 16 歳を除く各年齢で、女子は 10 歳を除く各年齢で全国値より低くなっている。

（図 11、12、統計表６）

図11　肥満傾向児の出現率の比較（男子）

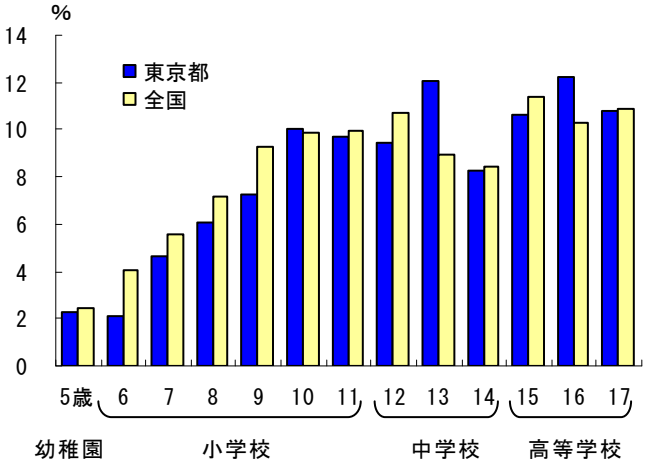
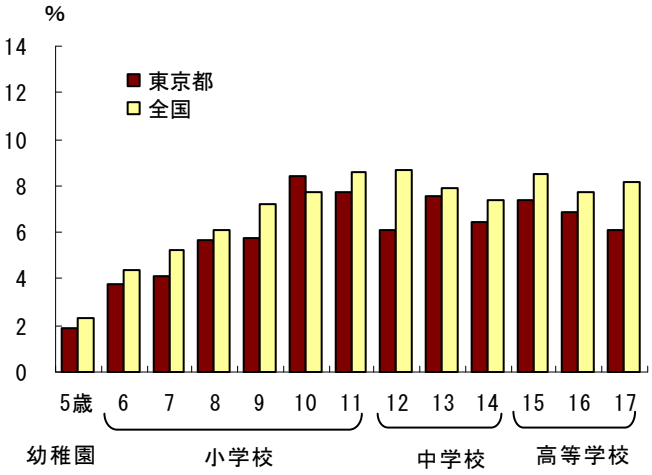


図12　肥満傾向児の出現率の比較（女子）



（２）　痩身傾向児の出現率

①　年齢別に痩身傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は 11 歳で 3.89%、女子は 14 歳で 4.47%となっている。

②　全国値と比較すると、男子は５歳から 10 歳、12 歳及び 15 歳の各年齢で全国値より低くなっている。女子は５歳、６歳、10 歳から 14 歳及び 17 歳の各年齢で全国値より高くなっている。

（図 13、14、統計表７）

図13　痩身傾向児の出現率の比較（男子）

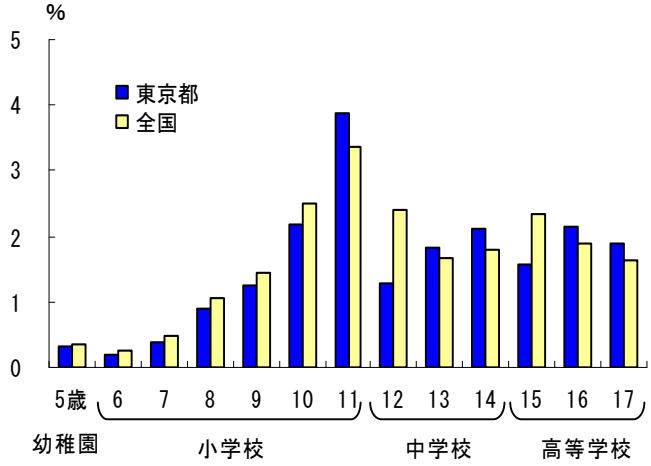
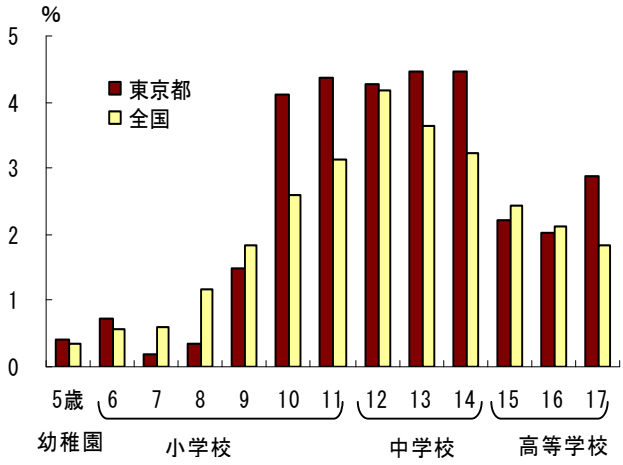


図14　痩身傾向児の出現率の比較（女子）



肥満度の求め方は以下のとおりである。

性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を算出し，肥満度が 20%以上の者を肥満傾向児、－20%以下の者を痩身傾向児としている。

算式は以下のとおりである。

肥満度＝〔実測体重(kg)－身長別標準体重(kg)〕/ 身長別標準体重(kg)× 100（%）

※　身長別標準体重の求め方

身長別標準体重(kg)＝ a ×実測身長(cm)－ b

係数 / 年齢	男子		女子	
	a	b	a	b
5歳	0.386	23.699	0.377	22.750
6歳	0.461	32.382	0.458	32.079
7歳	0.513	38.878	0.508	38.367
8歳	0.592	48.804	0.561	45.006
9歳	0.687	61.390	0.652	56.992
10歳	0.752	70.461	0.730	68.091
11歳	0.782	75.106	0.803	78.846
12歳	0.783	75.642	0.796	76.934
13歳	0.815	81.348	0.655	54.234
14歳	0.832	83.695	0.594	43.264
15歳	0.766	70.989	0.560	37.002
16歳	0.656	51.822	0.578	39.057
17歳	0.672	53.642	0.598	42.339

出典：財団法人日本学校保健会「児童生徒の健康診断マニュアル(改訂版)」平成18年